

「マルタ島のユダヤ人」(クリストファー・マローウ)

地中海のマルタ島のユダヤ商人バラバスは東西交易によつて巨萬の富を築き、強國トルコの艦隊が島に押寄せて來ても、島内の緊張を他所に、島民が皆殺しにされやうが「おれと娘と、おれの財産が助かりや、それでいい」と嘯いてゐる。艦隊がやつて來たのは、トルコに朝貢するマルタ島の總督に對し滞納分の貢物を即刻全納せよと要求する爲であつた。困卻した總督はユダヤ商人達から財産を捲上げ急場を凌がうとするが、バラバスは強く抵抗し、その擧句、全財産を沒收される。

怒つたバラバスは「絶對絶命となりやどんな策を弄してもかまはん」とて、財産の奪還及び總督への復讐を劃策し、娘のアビゲイルに總督の息子が戀慕してゐるのを幸ひ、彼と娘の戀人とが戀の諍ひを起すやうに仕組んだ結果、二人の戀仇は殺合ひをして死んで了ふ。アビゲイルは二人が父の復讐心故に死んだ事を知つて、世を憐みユダヤ教を捨てキリスト教の修道院に入

る。バラバスは激怒して、父祖の信仰や父親を捨てるなど言語同斷、許せぬとて、修道女達に毒入りの粥を食はせて皆殺しにする。アビゲイルはいまは今際の際に修道士に父親の悪業を告白して死ぬ。

修道院の葬儀の鐘が鳴り、「キリスト教徒の弔ひの鐘ほどいい音楽はないなあ」とバラバスが悦に入つてゐると、修道士達がやつて来て、秘密を握つてゐる事を仄めかす。バラバスは、奴らが「おれを死刑にする材料を手に入れてゐる」以上「生かしておくわけにはいかん」とて、策略を用ゐて修道士達を亡き者にするが、手下に裏切られて彼の悪事の一切が總督に知られて了ふ。

バラバスは窮地に陥るが、マルタ島の支配權を狙ふスペインが總督を味方につけてトルコ軍を撃退せんとしてゐるのを知つて、トルコ軍を密かに島に誘ひ入れ、總督を捕へさせ、自ら總督の地位を手に入れる。が、マルタ島民に憎まれた儘では己れの地位と權力は不安定たらざるを得ないと考へた彼は、「いちばんおれに得をさせてくれる奴がおれの友だちになるのさ」と嘯いて、今度は囚はれの身の前總督に近づき、トルコ軍を騙して皆殺しにしてマルタ島を解放してやらうと持掛けて、多額の報酬及び終身總督の地位を約束させる。

「天が下にこれほどの欺瞞が行はれたことがあるか」とて、バラバスは意氣揚々の體だつたが、

土壇場になつて、前總督にどんでん返しを喰ひ、トルコ軍の爲に自ら仕掛けた罠に自ら嵌り、煮えたぎる大釜の中で悶え死ぬ。

英國ルネッサンスの頂點たるエリザベス朝演劇を自らも代表し、シェイクスピアにも大きな影響を與へたクリストファー・マーロウの作品であるが、時に人間的な弱點も示す「ヴェニス商人」のシャイロックと異り、バラバスの自我主義の徹底ぶりは何ともはや凄じい。マーロウは無神論者の嫌疑をかけられた事もあるさうだが、いかにも彼の主人公は舊來の道德の束縛も情愛の絆も平然と踏み躪る。マーロウは作品の冒頭にイタリア・ルネッサンスを代表するマキャヴェリを口上役として登場させ、彼に現實世界に於ける權謀術數や血や力の役割の重要性を力説させてゐるが、T・S・エリオットの云ふ「超人間的な恩寵などの附加されてゐない人間そのもの」の眞實を描いたマキャヴェリへの共感無くして、バラバスなるマキャヴェリアンの怪物の出現も無かつたであらう。「おれほど自分に近い奴はゐない」とか、「人の仕合はせはわが仕合はせならず」とか、「おれはかうして生きるんだ、全世界は滅びるがいい」とかいふ類の彼の科白は、新たな眼で人間性の眞實を直視したルネッサンス人の頗る率直な感懷の吐露でもあつた。（小津次郎譯、「エリザベス朝演劇集」、筑摩書房）